



氷見市教育研究所

〒935-0016 氷見市本町 4-9
(氷見市教育文化センター内)TEL 0766-74-8221 (代)
FAX 0766-72-8122
e-mail kyouikukenkyu@city.himi.lg.jp
ホームページ http://www.city.himi.toyama.jp/hp/
menu000000500/hpg000000416.htm

多忙感と充実感は紙一重

氷見市小学校長会会長 大嶋 充

最近、多忙感という言葉をよく耳にする。確かに、教員の職務内容は複雑・多岐にわたり多忙化しているのかも知れない。しかし、私自身の教員生活を振り返ってみると、充実感でいっぱいである。それは、多忙であったがいわゆる多忙感など感じている暇がなかったというのが正しい表現かも知れない。

本県における教員としての振り出しは、もう廃校となった八尾の山手の大長谷小学校栃折分校であった。そこで、3人の複式学級の担任としての教員人生が始まった。宿舎で寝泊まりし、土曜日に家に帰り、日曜日にまた戻るという生活であった。そこで3人の子どもたちと、真っ暗になるまで外で遊んだ。野球をするには人数が足りなく、よくキャッチボールをして遊んだのである。あまり強く投げるとボールがグラウンドからころがり、近くの田んぼに入ってしまうので、ぞうきんをよく投げて遊んでいたのを覚えている。今も行われているが、町の連合体育大会を目指しての練習であった。山の子どもたちは純情で真面目で粘り強く、それは真剣そのものであった。練習の成果が実り、町の体育大会のソフトボール投げで見事1位になってくれた。そのときのうれしさは、言葉では簡単に言い表せないくらいの感動であった。後に、その子がやり投げの選手となり、ついにアトランタオリンピック日本代表として出場することになる。昨年、本校での講演会で講師をお願いし、児童と保護者にそれらのことを話していただいた。人間として立派に成長した姿を拝見し、感慨深く、教師冥利につきる瞬間であった。

氷見での最初の勤務校は、藪田小学校であった。そこでは、社会科の水産業の学習はもちろん、獅子舞を教育活動に位置づけ、地域を巻き込んでのダイナミックな活動が展開されることになる。

藪田・小杉・泊と3つの地区の顔の異なる

獅子頭を井波で制作していただき、運動会や学習発表会、校区の老人会などで発表・披露し、校区の皆様から好評を博したのがつい昨日のこことのである。その取り組みは当時としてはめずらしく、NHKの番組、ズームイン朝（当時は徳光和夫氏が司会）等、県内のテレビ局や新聞に大きく取り上げられたのを思い出す。また、藪田小勤務時には「われは海の子」という唱歌が学習指導要領から姿を消すということで、私の下手な伴奏で子どもたちとテレビに出演したことも強く心に残っている。また、この頃約10年間、氷見市母子寮少年指導員の辞令を受け、夜は母子寮で子どもたちと勉強したり遊んだりしたことも懐かしい思い出である。

そして、窪小学校での勤務となるが、ここでは「埴輪」の制作が思い出である。保護者と一緒にグラウンドに穴を掘り、一晩がかりで火を燃やし続けたのを鮮明に覚えている。その埴輪は、現在も窪小の玄関に展示されている。窪小へは、縁あって2度勤務することになるのだが、校長として勤務した2度目は県の音楽科教育の指定校として「窪小愛唱歌集」を発刊し、ラジオの1時間番組にゲストとして招かれたことも貴重な体験である。

校長として最初に赴任した宮田小学校では文科省のフロンティア研究校として、学力の向上について地域ぐるみで取り組んだ。

そして、現任校の朝日丘小学校では、ユネスコ・スクールに承認され、また、県の社会科の研究指定を受け、楽しく充実した教育活動を展開させていただいている。

教員人生を振り返ってみると、私のような浅学非才の者が多くの仕事をさせていただき働かせていただいたことに対して、多忙感どころか充実感・成就感・満足感でいっぱいの気持ちである。愛する子どものために命がけで、生き甲斐をもって働くことができる幸福感でいっぱいの今日この頃である。

充実した教育セミナー

第1回 教育セミナー

8月8日(月)実施

演題 「全国学力・学習状況調査の結果を生かした授業改善」

講師 国立教育政策研究所 学力調査官 磯部 年晃 先生

講師の磯部先生は、全国学力調査結果から見えてくる課題と改善方法等について具体例を示しながら話してくださいました。その講演の概要と聴講された先生方の感想の一部を紹介します。

○ 調査結果は、授業改善のチャンス！

- ◆ なぜ、活用なのかを全国調査からとらえ直してみよう。
- ◆ 自校の児童生徒の実態を的確に把握することから始めよう。
- ◆ 自身の教育観・授業観を再考してみよう。

○ 調査結果から何を読み取ることが求められているのか

- ◆ 正答率・無答率は大切であるが、そこだけに着眼しない。
- ◆ 解答類型への着眼から、自校の児童生徒に大切にしたい学習活動を構想しよう。

○ 調査から明らかになった課題から、授業改善を！

- ◆ できていないのは、記述式の問題だけ？
- ◆ 「わかる」と「できる」の調和的な展開こそ、授業改善の根幹となる。

○ 思考力・判断力・表現力を育成する授業づくり

- ◆ 授業改善の3つのキーワード 一脱！形式、脱！固定、脱！形骸！一
- ◆ 大切にしたい言語活動の具体化を図ろう。
- ◆ 日常化できる手だての共有化がポイント



《授業のアイデア例より》 第5学年 数量関係

2割引券を使うと値引きされる金額が最も大きくなる商品を選びそのわけを書く。

商品

・ シャツ	1900円
・ ズボン	3900円
・ くつ	5800円

子ども

くつです。くつは定価が一番高いからです。

先生

どうして、定価が一番高いと値引きされる金額が大きくなるのですか？

※ この場合、先生には、子どもに理由を説明するために必要な事柄は何かを理解させる必要がある。そして、くつに割引券を使うと値引きされる金額が一番大きくなるわけを、整理して板書しなければならない。このように授業においては、「なぜ？」「そのわけは？」と理由や根拠を問うようにする。

《先生方の感想》

氷見市立明和小学校 教諭 表 克昌

本校では今年度「子どもが自分の考えを図や表などを使って説明できるようになるために教師はどのような指導をすればよいか」ということに取り組んでいる。今日の講義はとても参考になった。その中でも、子どもは最終的にどのようなことが説明できればよいか明確にすること、そして、そのために教員同士が協議することの大切さが分かった。また、これからは誤答を分析して授業改善に生かしたい。

氷見市立湖南小学校 教諭 宮越 孝子

「調査結果は授業改善のチャンス」ということが実感できた。学力調査の問題が解ける解けないという成績ばかりに目が向きがちであったが、大切なのは、子どもたちの「思考力・判断力・表現力」を高めること。それにはやはり、授業改善である。先生がおっしゃった「授業改善のキーワードは“なぜ”、“どうして”（根拠を問うこと）」という言葉に常に意識して授業改善に取り組んでいきたいと思った。また、実際に問題に取り組み、先生の助言や解説をお聞きして、学力調査の問題は魅力的な教材でもあると気づいた。授業アイデア例も活用していきたい。

氷見市立北部中学校 教諭 焼田ちあき

データや実際の問題から、日々の授業をどのように改善していけばよいかを具体的に教えていただいた。できていないことばかりではなく、どの部分できていないか、生徒の実態を丁寧にとらえた上でどのようになってほしいかということを確認して、授業を組み立てていくことが大切だと感じた。また、日々の授業を見つめ直し、少し工夫を加える、根拠や意図、ねらいを問い返す場面をつくることを、今後の実践の中に取り入れていきたいと思った。「わかる」と「できる」の関係、調和についても分かりやすく教えていただき大変勉強になった。

第2回 教育セミナー
8月26日(金)実施

演題 「子どもの心に響く道德の授業づくり」
講師 京都市教育委員会 指導部長
柴原 弘志 先生



「いのち」を大切にすることは、豊かな道德性をはぐくむ根幹である。
道德の時間は「自己内対話をする(自分を見つめる)」時間である。
柴原先生は昨年に引き続き、道德の時間を心に響く時間とするために、どのように進めたらよいかを熱く語ってくださいました。講演の概要と聴講された先生方の感想の一部を紹介します。

① 指導する教師の基本的姿勢

- ◇ 児童生徒と共に、立ち止まり、振り返り、人間としての生き方について考える姿勢が必要である。
- ◇ 児童生徒一人一人のよさや可能性に着目すべきであり、その課題性を固定的にとらえてはならない。

② 資料に関して

- ◇ 資料から「人間」が読み取れるか。
- ◇ 「人間」と「自分」が深く見つめられるか。
 - ・ 心の中を映し出す内視鏡としての資料
 - ・ 心を磨く砥石としての資料
 - ・ 人間としての生き方について考えるための共通の土俵としての資料
 - ・ 複数資料の活用(補助資料としての「心のノート」)

心に響く道德の授業づくり

「言葉化」と「聴き合い 語り合い」を大切に!

そのために教師は、「子どもに聴く」姿勢を大切に!

③ ねらいに関して (中心発問は何?!)

- ◇ ねらいは適切であるか、明確になっているか。
 - ・ 1時間のねらいの具体化
 - ・ ポイントの箇条書き
- ◇ 児童生徒の内面を把握する手だてが用意されているか。
 - ・ 自己受容と自己理解

④ 指導の諸方法に関して

- ◇ 児童生徒が自分の生き方の問題として、意欲をもって学習に取り組むよう工夫されているか。
 - ・ 考えたいような問い
 - ・ 他の人の考えを聞きたいような問い
 - ・ 自問・自省できるような問い等
- ◇ 効果的な指導体制が工夫されているか。

《 先生方の感想 》

氷見市立上庄小学校 教諭 中野 聖子

「子どもに聴く」ということが心に響く授業をする上で、とても大切だということに改めて感じた。クラスの子どもたちは道德の時間が好きなので、教師の方がもっと子どもの内面に寄り添った授業をしていかなければならないと思った。また、「子どもをみる」「言語化して対話する」「副詞を大切にして資料を読む」「中心発問について考える」「余韻が残る終末を工夫する」など、他にも詳しく教えていただいた。今後学んだことを取り入れ、聴き合い、語り合える道德の時間にしていきたい。

氷見市立宮田小学校 教諭 有澤由美子

中心発問→価値の一般化など、道德の授業はだいたいこのパターンが決まっていると思っていた。しかし、パターンだけを意識した工夫のない授業は、子どもにとって知的な驚きや感動のないつまらないものになってしまうと感じた。ネームプレートを用いた全員が参加する工夫、子どもに聴く姿勢の大切さなども大変参考になった。柴原先生のお話を聴くうちに、生き生きと子どもが参加する授業の様子を頭の中で思い描くことができた。有意義な研修会であった。

氷見市立十三中学校 教諭 大道 隆也

柴原先生の講演をとっても興味深く楽しく聴かせていただいた。まさに聴きたいと思っていたことであった。自分は子どもの心に響く道德授業を常にしたいと思いながら指導に当たっている。講演を聴いて「子どもに聴く」ことの大切さを改めて感じた。教科では学べないことを学ぶことができる道德の時間が私は好きである。ただ「子どもに聴く」ということがおろそかになっていたように思う。教師がよい資料と思っても、子どもは同じように感じるとは限らない。子どもの心を大切にしながら授業づくりに取り組んでいきたい。

市科学作品展より

9月10日（土）と11日（日）の2日間、氷見市教育文化センターで氷見市児童生徒科学作品展覧会が開催されました。今年度の出品点数は、小学校39点、中学校44点、合計83点でした。身近な生活の中で抱いた疑問、学校の学習で興味がわいた事柄を子どもらしい発想で課題に設定して研究したものが多く、その中には、数年にわたって継続して研究を続けているものもあり、どの作品も粘り強く課題の解明に取り組んだ力作ぞろいでした。

審査の結果、金賞を受賞された小学校6点、中学校2点の作品を「氷見市児童生徒科学作品展覧会優秀作品集」として収録し各学校に紹介しました。この優秀作品を参考にして、今後の指導に役立てていただき、来年度以降も多くの素晴らしい作品が出品されることを期待します。

なお、小学校4点、中学校2点が県の科学展覧会に出品されます。会場は富山市科学博物館で、期日は10月21日（金）～24日（月）、時間は9：00～16：00（24日は午前中のみ）となっています。



<金賞を受賞された皆さん>

「氷見市教育振興基本計画」（仮称）を策定中です

現在策定中の「氷見市教育振興基本計画」（仮称）については、小・中校長会議や氷見市教育研究所が委嘱した研究推進委員会において説明しましたので、ご存じの先生方も多いと思います。

この計画は、市教育委員会が国や県の教育振興基本計画に照らし合わせて、地域の実情に合った教育施策をより効果的に実施していくために関連する施策全体を系統づけたものです。計画は今年度中に策定され、平成24年度から28年度までの5年間で実施されます。

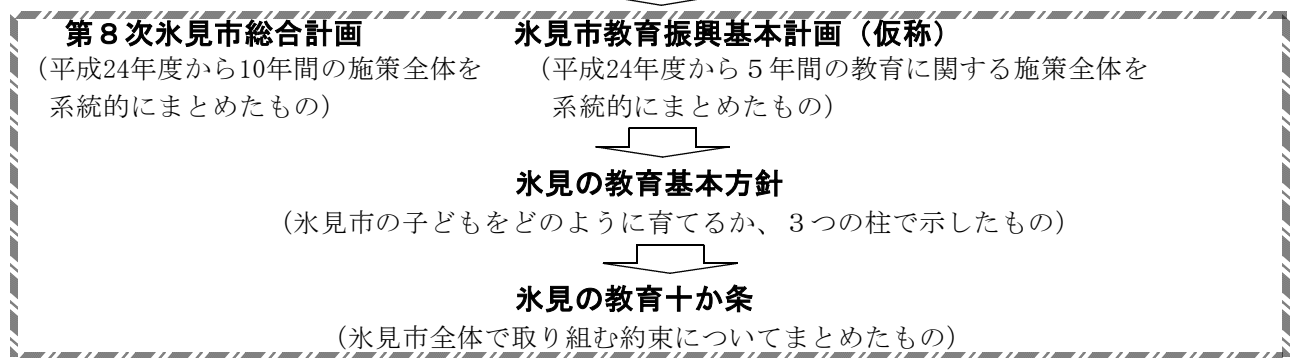
また、本年度教育研究所が委嘱したふるさと教育推進委員会では、この「氷見市教育振興基本計画」（仮称）との関連を図りながら、「氷見の教育基本方針」の改訂を進めています。さらに、学力向上推進委員会では、氷見市内の教員、児童生徒、保護者が取り組む教育に関する約束についてまとめた「氷見の教育十か条」も本年度中に配布予定です。

一方、氷見市では、平成24年度から33年度までの10年間の氷見市政運営の根本となるまちづくりの目標を明らかにし、これを達成するための基本方針を示す「第8次氷見市総合計画」も策定中です。

社会の変化が進む中、教育の更なる振興を図っていくためには、今後の氷見市が目指す教育の基本的な方向を明確にするとともに、その実現に向けて、どのような教育施策を、どのように進めていくかを明確にしていく必要があります。また、学校だけでなく、家庭や地域社会等との協力・連携・役割分担も重要です。

各学校において、保護者や地域の方々の信頼を得て、特色ある教育を進めていくためにも、今後策定される「氷見市教育振興基本計画」（仮称）をよく理解して日々の教育活動を進めていく必要があると思います。

国や富山県の教育振興基本計画



紹介したい掲載記事

文章の抜粋

今月も教育研究所で取り揃えている教育雑誌等の中から、心に残った記事の一部を紹介します。全文を読みたい方は、本の貸し出しをしていますので、利用してください。

◎ 総合教育技術 10月号 巻頭インタビューより

作家 池井戸 潤

目先の利益、目先の成果ではなく、本当に考えなければいけないのは10年後20年後の日本の姿である。

日本の未来を創るのは学校だと思う。10年後20年後の日本を豊かにし救えるのは、今、学校しかない、教育しかない。教育というのは積み重ねであってすぐには結論が出ないものだが長いスパンで先を見る目をもって、豊かな教育を目指してほしい。

学ぶことの大切さは、成功するためのスキルというよりは、弱い人の気持ちが分かるとか、豊かな心をもつことだと思う。

- ◆ 「下町ロケット」の著者・池井戸さんは、日本の未来を創る学校教育への思いを文章にしておられます。

◎ 総合教育技術 10月号「育てる楽しみ、伸びる喜び」 植草学園大学 教授 野口 芳宏

教育すべきことは、いつでも、どこでも即実践 —教わって伸びる喜びの為に—

6歳になると小学校に入学する。月曜日になると登校する。遅刻をしてはいけない。1時間目は〇〇、2時間目は□□・・・こうして全ては決められている。つまり、それらは、強制であり、それらに素直に従って学ぶ子が伸びるのである。教育の基本は強制である、というのが私の一つの信条である。よいと思うことは、どんどん教えてやることが肝要なのだ。ところが、自主性とか自発性とか主体性などという言葉が教育界を覆って、「教えること」が何となくよくないことでもあるかのように学校現場に広がっている。これは誤りだ。

価値ある強制、善意の強制は、愛の行為そのものであり、胸を張ってよいことはどんどん教えていくべきである。教えなければ伸びない。教えれば伸びるということである。

- ◆ 小学校教員・校長として、50年以上にわたり教育に携わられた野口教授による教育の基本に関する記事です。

◎ 道徳教育 10月号 「心がうち震える『ほんものの道徳授業』を！」

明治大学 教授 諸富 祥彦

1学期に一度でいい「心が震える授業」を

「人生で、本当に大切なことは、これなんだ。」教師のそんな思いを、最もストレートに、真剣に伝えることができるのが、「道徳」の時間である。

教師が「本当に伝えたいこと」「伝えるべき中身」を、心を込めて語り、伝えると、子どもたちの心はうち震え始めるはずである。「今日の先生は『人生で、本当に大切なこと』を本気で伝えようとしている・・・」そんな感覚の残る授業がほんものの道徳授業である。

- ◆ 8月に行われた第2回教育セミナーでは、柴原先生から「子どもの心に響く道徳の授業づくり」の話聞く機会がありました。こちらは、諸富教授による別の視点からみた「ほんものの道徳授業」についての記事です。

◎ 学校教育相談 10月号 「わかる。わかるけど、あかん」 寝屋川市教育委員会

指導主事 竹内 和雄

「共感的理解」「待つ重要性」は、教育相談では基本中の基本であり、実践しているつもりだったが、自分がそれまでしてきたことが、いかに表面的で、甘かったを痛感した。

自立支援施設の寮長は、無断外出した裕子と話し始めた。寮長の発した言葉は「なんで無断外出したんや？話しなさい」と「で？」だけ。そして、最後に「わかる。わかるけど、あかん」。どうして長い沈黙の後に、裕子は全部話したのか？それは、子どもの気持ちを聞き、しっかりと受け止めたことである。起こした問題の表面だけを見てはいけない。重要なことは、なぜ、問題を起こしてしまったのか、子どもが自分で考える時間を確保してあげること。子ども自身が自分の気持ちを言葉に出して理解でき、その言葉を大人がしっかりと受け止め、そして、しっかりと叱ってあげること。どうしたらいいかは子どもは最初から分かっている。

- ◆ 若い先生に教育相談の魅力を伝えようと、竹内先生は、自身の体験から気づいたことや学んだことを文章にしておられます。